令和５年度　第２回

西宮市地域福祉計画策定委員会

会　議　録

□開催日時　令和６年３月18日(月)　午後２時～

□開催場所　西宮市役所第２庁舎６階　Ｂ601・602会議室

□出席者

委　員：竹端会長，田村副会長，勝木委員，北垣委員，北嶋委員，貴山委員
古結委員，清水委員，角野委員，長谷川委員，林委員，平尾委員
丸尾委員，三池委員，村上委員，芳川委員

議事（１）第２回地域福祉計画ワークショップ開催報告

○会長

それでは、議事に移りたいと思います。議事の１、第２回地域福祉計画ワークショップ開催報告について、事務局から資料説明をお願いいたします。

（事務局説明）

○会長

ありがとうございました。それぞれ出られた方はどんなことを感じられたのか、言葉をいただきたいです。進行していただいた副会長から、どのような感じだったか教えてください。

○副会長

開催に当たりまして、お忙しい中ご参加いただいた皆さん、ありがとうございました。会長不在だったので、どうなるか不安もあったのですが、２回目のほうが皆さんもイメージが少しできたのか、スムーズに進行できたような印象を受けております。

１回目にワークショップをさせてもらったときは、「社会的孤立」という少し広めのテーマを取って、皆さんが知り合うことに重きを置いたのですが、今回２回目でやったのは、「支援の切れ目」というところをもう少し絞って、それも『8050問題』、『子供』、２つの分野に分けてやったことで、少し近しい分野で活動される方々が、身近なところに課題を寄せつけて情報交換できたのではないかなと思っています。

また、委員と委員がご紹介ということで、委員以外の方も連れてきていただいたということで、人が広がるような形でワークショップができたのも、ひとつ大きな成果ではなかったかなと思っています。

あと、まとめのところで、①から⑤まで少し整理という形でこのあいだからやったのですが、連携体制の構築とか協働が必要と皆さん言われるけど、やはり言葉で言ったとしても、実感しないと行動にはなかなか移らないところがあるので、その前の①番、②番、視点の違いを理解するということや、何でこれが必要なのかを、自分たちが知らないことがたくさんあるということを実感する時間になったかなという意味で、今回のワークショップをできてよかったのかなと思います。

○会長

ありがとうございます。他に参加された方、委員は参加されてみてどんな感じでしたか。

○委員

私は、コミュニティ協会のほうから出させていただいてるんですけど、8050問題について、寝たきりになっていながら、そして家族と一緒に住んでるけれども、家族は仕事にも行かないといけない、ということを話させていただきました。それから、いまもそれが続いているという感じがしましたので、これからも問題点として取り上げていきたいなと思っております。以上です。

○会長
　ありがとうございます。では、次は委員お願いします。

○委員
　今回のワークショップに参加して思ったことですが、私は専門職ではありません。ただ、地域の資源の１つであって、地域のつながりとか連携、協働という意味では、多様な主体のネットワークの１つとして、どういうふうに関わっていくかが、これからすごく大切になっていくのではないかなというのを改めて感じました。

○会長
　ついでに委員に伺いたいのですが、コープこうべが持っているつながりと地域福祉のつながりは、重なっているところもあれば、違うところもあると思います。
　今回、地域福祉のつながりの中のワークショップに入ってみられて、どこの部分では一緒で、どこの部分は違うとか、どこの部分であればコープこうべも役に立てそうだとか、何か思ったことはありますか。

○委員
　コープこうべってひとくくりでいうと１つのものに見えるのですが、店舗の売り場での福祉的な関わりと、宅配という意味での見守りでの関わりと、あと、私たちは地域活動をしていて、つどい場などのつながりをつくるという意味での関わりといった関わり方があるので、ひとくくりではなかなか難しいけれども、いろんな接点で地域福祉に関わっていけるかなと改めて感じました。

○会長
　これは、店舗での関わり、配達での関わり、組合員活動の地域づくりの関わりが、地域福祉みたいなところとはあまり思わずに、普通に着々とされていたという感じでしょうか。

○委員
　そうですね。

○会長
　それが、こういうところに来てみると、意外と地域福祉と接点があるのかみたいなことを思われたということですね。

○委員
　改めて、自分たちもその地域の資源の１つなんだなということを自覚したという感じです。

○会長
　ありがとうございます。では、委員お願いします。

○委員

どんなことを話したかというと、いろんな形で私達民生委員活動の中のお話をさせていただいたのですが、全体的に各団体の方、委員のところも、ご相談はなくても自分たちが気になるところを追っていって、フォローしていくところに感動しましたし、ヤングケアラーの話を聞かせてもらって、なかなか難しい話だけども、みんなでやっていかなければならないことなのかなと思いました。ただその取っ掛かりがなかなか見つからないところで、どんな形でつながっていくべきなのかなということを、地域の中では話をしました。

○会長

地域の中で話をしたというと、伺ったところ、民生委員・児童委員会の常務研究会で、この話をしていただいたんですよね。参考資料１の７ページに、西宮市民生委員・児童委員会常務研究会報告というのがありますので、これどんな感じでされたのか聞かせていただけますか。

○委員

このワークショップを受けて、地域福祉計画と地域での連携はとても大事なことだと思い、常務研究会のほうで講演していただきました。この研究会につきましては、各校区の常務・副常務として、校区内の運営についてどういうふうに考えられて、考えを求められているかということと、民生委員としての連携とは何か、連携に伴う活動への意義を、必要性を、他校区との違いを聞くことによって、気づけるような研究会であったと私は思っております。それぞれの校区の常務・副常務も一生懸命考えて活動を続けていると思いますけれども、なぜこのような形で他の団体とつながっていかなければならないんだという疑問を持っておられる常務・副常務もおりますので、その点でお話をされたということも聞いております。他の団体ともつながっていくことは、民生委員にとって、本当に大事なことだと私は思っております。

民生委員活動だけではとても地域のことは分かりませんので、いろんな形でつながっていかなければならないのかなと思っておりますし、民生委員が何もかも仕事として受けることも、いかがなものかなとも思っています。民生委員の意思を尊重した上で、こんなふうな形で団体とつながっていますよというものを、しっかり民生委員会として届けていかなければならないのではないかと思っています。

ただ、民生委員は何もしないというマイナス的なうわさだけが広まっていくことは、とても私は不本意ですので、そうではないということを、ちゃんとみなさんにお伝えしていかなければならないかなと思っています。

○会長

僕はその場にいなかったので教えていただきたいのですが、今回、この12月に開かれたワークショップの内容について聞かれた上で、自分たちはどんなふうによその団体とつながれるか、というようなことについても話し合っていただいたのでしょうか。

○委員

各グループに分かれましたので、いろんな意見が出たと思います。うちの班も、やはり活動についてはお話があがりました。３校区か４校区だったので、みんなばらばらでした。だけど、それぞれの方がちゃんとしたことをされているだろうと思いますし、やり方がどうのこうのではなくて、民生委員が本当に理解して、了解してやっているのかということが、とても大事ではないかなと思います。「やらされている」ではなくて、自分たちからやる・やろうという気持ちをしっかりと持っていることがとても大事かなと思っております。

○会長

少しドキドキした質問なのですが、民生委員さん、今回は常務の皆さんが地域福祉計画でやっていることを学ばれたということですが、民生委員さんは地域福祉計画をご存じでしたか。多分、初めて知ったという方が結構多いですよね。

○委員

はい、そうです。

○会長

地域福祉のことをやる要として、最前線でやってくださっている民生委員さんがそれを知らなかったという意味では、今回、こういうのを知る場があったというのは、もしかしたら大きな意味があったかもしれないですね。

○委員

常務・副常務としては、とても大事な研究会だったなと思っております。

○会長

次、委員お願いいたします。ご参加された感想等いかがでしょうか。

○委員

私はＣグループに参加させていただいて、正直なところ、行政にこれだけの支援体制があるのにびっくりしましたし、それから知らなかった。自分自身も知らなかったし、まだまだ地域の中でも知らない方も多いのではないでしょうか、という印象を持ちました。そういう意味では、発信の必要性を非常に痛感します。それが１つ。

あとは、やはり関わり方、関わっていくことの大切さというものを痛感しました。そこに、関わり方について、プライバシーの問題、あるいは守秘義務、どうしても個人情報の壁があるなと感じました。

○会長

その点については、行政もすごくもやもやしていると思うので、むしろ教えていただきたいのですが、行政からしたらホームページでも出しているし、行政便りにも出しているんだと言いたいけれど、それでは全然足らないということでしょうか。

○委員
　市政ニュースを極力見るようにしています。特にこの委員会に出席させてもらってから、意識して見るようになりました。

○会長
　でも、そんなマニアックな市民はなかなかいないですよね。だから、そこをどう伝えるかというのが問題ですね。

○委員
　それは、受け取る側の情報網にも問題があるかもしれないですけどね。

○会長
　ありがとうございます。では次、委員お願いします。

○委員
　僕は、8050問題でお話を聞かせていただいて、そもそもそれぞれの方が思い描いてらっしゃる現場での困り事というか、そこの共有がなかなかできてなかったのかなというのが一つあります。例えば、この中でアプローチのことなんかでも、その接点が切れてしまうのは何でなんだろう。日々の挨拶とか、そういったものがないから切れてしまうんじゃないかとか。あとは、抽象的な、粘り強い関わり合いという話も、それは誰が日頃やってくれているのかというところなんかを、委員のところに一度伺ったんです。皆さんのお話を伺っている中で、民生委員の方たちや自治体で活動されている方たちが、結構粘り強くお話を聞いていただいていると知りました。また、専門職が意外と動いてくれないという少し耳が痛いお話もいただいたりしながら、今回、このワークショップに伺いました。
　今、市政ニュースのお話がありましたが、市政ニュースって市民には渡るんですけど、サービス提供を事業・なりわいとしている事業者には届かないですよね。市の施策なり市の広報紙あるいは市政ニュースが事業所に届いていないと、最近、うちの職場の人間から聞いたので、僕の家のものを持っていって回覧する等しながら、情報共有を図っています。その辺も必要なことなのかなと思います。

○会長
　ありがとうございます。委員、お願いします。

○委員
　今回、ワークショップをやらせていただいた中で、参加されている皆さんがフラットな関係でと言いながら、どこまでフラットにいけるのかなというのが、毎回心配になるんですけど。最初は少し緊張があって、という感じでしたが、進んでいく中で皆さんがざっくばらんに、いろいろと考えていることを伝え合っていったなというのはすごく感じました。
　こういう会議へ出てくださるような方でさえ、なかなか情報ってキャッチし切れないです。情報が多いです、今の時代。自分に合った情報を選択できるかどうかということが、申請主

義になったこの中時代でとても重要になってきます。けれども、本人ができなかったとしても、周りにいる人たちが選択肢を示してあげられるようになっていくこと、とにかくこういう場で知らないことをどんどん知っていく、自分の頭の中をバージョンアップしていく、分からなかったら聞ける人をつくっていくところでいうと、こういう場づくりが、試験的にやった形ではあるのですが、そういう部分でもすごくいい効果があるのではないのかなと思っていました。

何より、結構、行政の方が、行って大丈夫かみたいな心配がありながら来るんですけど、みんなが本当に楽しそうにというか、結構大きなテーマについて話しているのですが、そこに負のエネルギーではなくて、プラスのエネルギーが外から見ていて見えるような活発な議論の場になって、ちょっと安心したというか、ほっとしたという感じです。また、継続してやっていけたらいいのかなとも思いました。

〇会長

委員、今のお話に関して、いかがですか。

〇委員

まずは、このワークショップが、本当に居心地のいいワークショップでした。かけ合いの感覚もすごく心地よくて、そういう形にしてくれているのが分かりましたし、知ろうという気持ちになれたようなワークショップとして、今までにないようなワークショップだと思いました。これだったら、何回でも参加したいなと思いますし、私も１人連れていきましたけど、また行きたいと言っています。これはすごいことだなとも思いました。

内容としては、高齢者の分野に限って、これをもって福祉だって言っていたのが非常に恥ずかしいぐらいで。話題の部分では、子供がポイントとなるわけですし、8050の問題の中でも、どうしてもつながってきて、未来に8050があるという話がたくさん出てきました。子供のフォローをほっとけない。だけど、自分は高齢者のほうにいるという…不思議な感覚だったのですが、つながるとか支援の切れ目は非常に大事だなとすごく思いました。

さらには、また絶対何かできるなと思って終わったのですが、何ができるんだろうなというのがまだ分からないままで、もんもんとした中で、この資料を頂いたときに、民生委員さんの報告のページを見て少しはっとしました。地域包括でも、実際に地域福祉計画を知っている人がどれだけいるんだろうと思うところがありまして。「地域福祉計画なんて、何？」って、私もずっとそう思ってきましたので、これは自分も絶対伝えるべきだなとも強く思いました。

〇会長

なるほど。多分、後ろで聞かれている事務局・傍聴者の皆さんや、今回、お忙しくて出られなかった方は、このワークショップとは何だろうと思われている人もいると思うので、あえて委員に聞きたいのですが、包括で普段やっている会議とか、包括の地域づくりと言われるところと、このワークショップは同じでしたか、違いましたか。

○委員

同じか違うかでは、違います。

いってみれば、普段はすでに切れている状態で高齢者のところだけが自分の目の前にありますので、そこに追われまくっています。子供のことは、私自身は仕事であったりとか、そこら辺で話を聞いたりはしていますけれども、実際は目の前の高齢者のところだけです。「だけ」って言い切っていいのか、ちょっと考えましたけど、おおよそ。

○会長

本来業務が高齢者であれば、高齢者のことしか見ない。本来業務が障害やったら、障害しか見ない。本来業務が子供やったら子供しか見ない。本来の地区担当がこの地区やったら、この地区しか見ない、あるいはコープやったら、うちの会社の話しか見ないところを超えて集まってしゃべってみると、どんな違いが見えてきたと言えますか。

そこが面白いと思ってくださったから、これ、よかったと思ってくださったのかと思うのですが。

○委員

違いですか。みんな一生懸命なんですよね、自分の身の回りのことはよく分かってるんですよね。だけど、ばらばらなんです。つながっていないことが違いでしょうか。

○会長

そう、つながっていないですよね。例えば、恐らく委員と委員はふだん、つながり得ない人ですよね。だって、子供の分野の人と高齢の分野の人。でも、話すネタが全くないのかといったら、きっとそんなことないですよね。でも、多分、出会う場がなかったら話をすることもない。委員、そんな感じですかね。

副会長、今までの話を聞いて、まとめてみてください。

○副会長

ＮＰＯの活動をしていても、自分の活動を基準にほかを見ることが多いです。でも、この地域福祉活動は、本来みんなが仲間としてやっていることをいつの間にか忘れて、狭いところで活動してしまうことに気づかない自分がいるんですけど、こういうグループワークをしたり、多分野を超えてやると、「仲間がいるんだ。分野が違うけど、一緒のほうに向かっているんだ」と意識ができるから、居心地がよかったり、「何かやれそうだな」という気持ちになる気がするんです。

同じ分野で固まっていると狭くなるものが、広がって、みんなやっている中で自分がどこにいるのかのような整理ができるというのが、僕はこのグループワーク、ワークショップのいいところかなと思っていて、そのあたりが感じてもらえたらよかったかなと思っています。

○会長
　その意味ですと委員は、前々回のワークショップに参加したことがきっかけになって、この間「ごちゃ混ぜサロン」というものをやってくださったということですが、40年ぐらい地域福祉のことをされている委員にとっても、「ごちゃ混ぜサロン」は面白かったですか。

○委員
　いや、行政の方とも喋っていると面白かったですよ。

○会長
　まず「ごちゃ混ぜサロン」とは何なのか、説明していただけますか。

○委員
　第１回のワークショップで、具体的に何かするようにと言われたので、ワークショップの場外乱闘戦のような感じでさせていただきました。
　「地域福祉で」とか「障害福祉で」とかいうのは全く関係なくて、お話ししていると、結局はみんなで一緒に生きていくために、どないすんねんみたいな話に行くんです。行くというか、そういう話を結局はしていることになっているところがとても大事で、何とかそれでも変えていこうというか、変わるのではないか、というような希望が見えてくることが大事だなと思いました。

○会長
　制度の話は、今日の資料の６ページ以降の重層的支援の話、制度の話は後半にするのですが、制度の話をせずに、現場のリアリティのある具体の話をするのが、委員、なぜ大事なのでしょうか。制度の話は制度の話でするわけじゃないですか。本来、こういう行政の審議会レベルのものって、制度をどうするのか委員会だけど、でも今回、地域福祉計画の委員さんでワークショップでは、制度の話は全くしていないわけです。制度につながる話はしたけども、制度の話をする前に、そういうことを違う人同士で話すのは、何がどう大事だと思われますか。

○委員
　制度の話では、平板な、自分の心の動きを伴わない論になりますから、それでは本当の意味の共生というか、自らの主体性も含めて、共生を実現していくことにはならないと思うので、むしろ、一緒に生きていくためにどうしたらよいかと、そこを本音で、立場性はもちろん持っているけども、出し合うことが根源的に大事なのではないかなと思います。

○会長
　なぜこのような話をしてきたかといいますと、実は、今年度は２回、ワークショップをさせてもらいました。次年度以降、どうしていくのかで、１つは、これは委員さんだけでやる話じゃなくて、そもそも地域レベルでやらなあかんよねという話と、この委員会としてどうせなあかんのかねという話があるので、そのあたりについて５ページのところ、次年度以降

のワークショップの開催について、事務局から説明していただけますか。

（事務局説明）

〇会長

ありがとうございます。ここに書いてありますように、今回は委員の皆さん同士での関係者間の活動に関する相互理解の重要性とか連携の必要性をこの委員会でまとめてきたのですが、それをまた深めていくためには、やはり具体的に地域ごとにこういうワークショップをしたほうがいいのではないかというところで、でも、いきなり西宮の全ての地区でやることは無理なので、モデル地区をつくって、各委員の皆さんや私たちが、例えばもし可能であればいいので、ご一緒に市役所と共にそれをやってみることで、こういうリアリティ、地域でどうなっているのかを聞くが、実は、地域福祉計画に書かれていることが本当にちゃんとやれているのか、ということの評価にもつながるので、こういうものをやってみたらどうかというご提案なのですが、これについて委員の皆さん、ご意見いかがでしょうか。

〇委員

エリアの中もそうですけれども、実は、市営住宅の管理運営委員会が発足されて以来継続が厳しかったんです。本年度、５年度初めに、運営委員会の会長さんは決まりましたが、あとの委員さんが１人も見当たらないという中で、この１年間なんとかやってきてくださったのですが、この度やはり解散、ということになりました。

私としてみたら、80から90％ぐらいの高齢化率の中を、そのまま放っておいていいのかなという思いを、ずっと持っておりまして。

そうしたら、今度は老人会すらも解散すると。そしたら、どこでお互いの、見守り合い・つながり合いを持っていくのかということが心配なってきて、市役所の土地、場所を貸していただけないでしょうかという話を担当の部署にお願いしたのですが、なかなかそれが難しいということでした。それをどうしていったらいいのかなというので、行政の方にお願いできればと思っています。

とりあえず月に何回か高齢者が一堂に集まって、互いが見守り合うような場所をつくっていかないと、多分大変なことになるのではないかなと。

民生委員が云々ではないのかも分かりませんけど、そこは民生委員がいない地域なんです。今私が代わりの民生委員として、元々は1棟だけずっと何年も持っていたんですけど、今は私１人だけなので、私が４棟400戸を自分が持っている600世帯プラス400戸を持つわけには到底いきませんので、どうにかしないといけないと私は思っています。

これは、地域全体で考えていかないといけないことだと思っているのですが、まず取っ掛かりをどこからするべきなのかなという。

〇委員

ワークショップというのはいろんなテーマに取り組んでいけるのですが、この地域版ワークショップに落とし込んでモデル地区を設けるのであれば、例えば独居生活の人が多くて、その人の課題をいかに解決していくかという喫緊の、今抱えている課題を見つけ出して、そ

れに関して話し合いをしないと、共生社会と言われても、実際のところこれが何のためにそうなっていくのかよくわからないのではないでしょうか。我々が生活している上で抱えている問題をどうやって解決するのかを探っていくということをモデル地区でやっていったらいいのではないかと思います。自分の身近なことで解決してもらえるということであれば、参加意識も増えていくかなという感じがします。

○会長

ありがとうございます。今の委員と委員の意見について、私の理解が合っているかどうか確認したいのですが、しんどい地域でしんどい問題をちゃんと議論することが、“ほんまもん”のモデル地域の１つになるのではないかということですよね。

これは、全く私、想定してなかったことで、おお、と思いながら聞いていたのですが、もともと私が想定していたのは、例えば副会長が入られているような地域であれば、割とやりやすいかなということで、そういう先駆的なところでやるというのは１つだなと思っていました。でも、今お二人の話を聞くと、あえて語弊のない形で言いたいのですが、両極端でやったほうがいいなと思い始めていて。

入りやすいところと課題が一番明確になっているところ、まさに両極端ですよね。やりやすいかどうかは別にして、その地域課題は出やすくなる。事務局及び我々が頭、知恵を絞らないといけませんが、おっしゃることはすごくよく分かります。

ほかに皆さん、次年度以降のワークショップについて何かご意見ありますか。

○委員

ワークショップですが、今、委員と委員もおっしゃったように、何のためにやるのかが明確でないと参加してもらいにくい、というのが一つです。このワークショップは、これまで地域福祉計画の評価に軸をおいて実施をしてきたところがあって、これを地域におろすとなると、その議論ができるだけの場や下地ができている地域とそうではない地域と、地域にそれぞれ特徴があるので、副会長が入られている鳴尾東地域のようなところだと、そういう議論ができる場がつくりやすいのではないかと思います。

一方で、委員がおっしゃっていただいたような明確な課題に対してワークショップをするということになると、今期のワークショップで想定してきたこととはまた別の、具体的にこの問題をどうやって解決していこうかという課題解決型のワークショップのほうが適切だと思います。ワークショップというやり方は同じですが、どこに軸を置くかによって、やり方は変わってくると思うんですよね。事務局で考えている計画を軸においたやり方を、自分たちで課題感を掴んでいる地域にそのまま持っていってしまうと、おそらく機能しません。

だから、この問題どうしようかと考えるワークショップ、参加型でやることのほうが、やるほうも効果が得られるというか、成果が出やすいのかなと思います。ここで議論するのは、計画に基づいての話がベースなので、そういった仕方をさせていただいているところではありますが、色々なところで、様々な形のワークショップがあっていいと思うんです。

ここでこんなことをしているからちょっと手伝って、と振ってもらう、色々な方たちが参加して、こんなことをやってみたいというワークショップがどんどん地域の中でできてくることのほうが、策定委員会に紐づいてどうのこうの、というより、すごく意味がある。そこ

に「よっしゃ、乗っかるわ」という人たちがこれだけいるわけですから、そういうふうに課題を解決していくためのワークショップとしたほうが、目的が明確にはっきりしやすいのかなと思います。

○副会長

鳴尾東地域に課題がないかと言われるとそうではなくて、外から見てどうかは分からないですが、住んでいる側からすると、まだまだ地域活動する人たちはつながっていないですし、課題も山積みの地域だと自覚をしています。だからこそ、ＮＰＯや、こういった取組が僕は必要なのだと思っています。

もう一つは、ワークショップというのはあちこちでやっていますが、それをやって、参加した人たちが、何か進む感覚というか実感がないものをやっても、多分つながらないですし、「そういうワークショップだったら、私たちの地域もやりたいな」という自発性につながらないと、おそらくやる意味がないと思うので、そういう意味では、エリア設定とかやり方はすごく重要だと思います。

今回、地域版でやりたいと案で出ているのは、今まで関わる機会がなかったり、分野が違う、でも同じエリアでやっている人たちが知り合って、「ああ、ここの地域でちょっと進みそうだな」という感覚であったりとか、前に進んでいく実践みたいなものを見せていく役割があるのではないかなと思うので、先ほど出た意見もそうですが、進む感覚をみんなで実感できるようなワークショップのエリア設定がいいかなとは思っています。

○事務局

先ほど委員にお話しいただいた内容ですが、自治体として考えますのは2040年問題で、場所はどこか、今ここで公表するわけにいかないですけど、まさに地縁団体が維持できなくなって崩壊しようとする現状がある。その中で、市として、その関係団体の方々が、そのコミュニティが崩壊したところを、どのようにそれぞれの役割の中で復活できるのか、そういったことが非常に大事なのかなと私は思っております。

私が最近好きな言葉で、「知ってる、できる、やっている」という言葉があるのですが、計画の中では「知ってる、できる」までですけど、計画策定後は「やっている」、その行為が必要となりますので、特に今回のお話については、まさに「やっている」ところに展開できるかどうか、ワークショップを通じて、この地域福祉計画の、令和10年度内に形が出るのかなというところまで持っていければと思います。成功するかどうかは別として、その結果、何が足らないのか、行政が何を補わなければいけないのか、そういったことを見てみたいなということで、委員にお話をしていただいたんです。

純粋に、その場所を使うか使わないか、市営住宅の集会所を使うか使わないかという話ではなくて、関係団体がどういうふうに注力すればコミュニティが復活するのか。鳴尾東地域から直線距離で２キロぐらいのところです。その距離でも、それだけの差があるというところは、非常に行政としては痛感します。

○会長

地区選定では、行政が例えばそういう課題感をつかんでいて、取り組まなければならないと思っているところと、先駆的である程度何かやりながらというところと、幾つかのテーマ設定があった上で、来年度、例えば３つか４つぐらいやってみる。そのために、この委員さんにも協力していただいて、この地区には何人かの方に行っていただきたい、というように運んでいただき、場合によっては、行政にがちっと入ってもらうなど、重みづけが地区ごとに違ってもいいと思います。

まさに今、事務局がおっしゃったように、計画をつくった後、私たちはやってみているのか、ということに加え、やったことをどう評価するのかということが求められていて、結局、青い冊子には美しい文言は書いてありますが、それができなければ、まさに絵に描いた餅になるわけです。私が今年度からずっとワークショップをやってきたのも、結局提案させていただいたものを中でちゃんと議論するためですし、この議論したことが、地域の中で具体的にどうなっているのか見なければならないということで、次年度以降、地域に移行、という話です。

事務局からおっしゃっていただいたように、行政としても気になる課題があれば、例えば来年度、市営住宅プラス、例えばもう１個ぐらいとか出してもらい、策定委員会からも１個、２個出し、３つ、４つの中からやれるところでワークショップをやってみよう、出たものを例えば策定委員会の場にも持ってくる。また、ワークショップにも委員の皆さんの中でも来られる人は一緒に来ていただいて、ワークショップをつくる段階から参加していただきたいです。例えば団地やったら委員も一緒に相談に乗ってもらうとか、委員もご興味あったら、一緒に参加していただけたらと思います。

つくり込む段階から、この委員の皆さんも一緒に入っていただいてやったほうが、おそらくほんまもんの評価になるのではないかなと思います。リアリティに対しての、ほんまもんの評価につながるような気がしていて、その形にさせていただいたほうがいいかなと思って聞いていました。ありがとうございました。他に皆さん、いかがでしょうか。

〔発言者なし〕

○会長

委員は、今話を聞いた部分で、リアリティとして、私の地域でとか、うちの園のあるところでそのようなことができそうか、ということなど、お話しいただけますか。

○委員

少しずれてしまうかもしれませんが、現実味としては、先ほどの市役所の支援やたくさんの制度があるとか、何かをグループとしてつくってしまうことで、逆に一般的な支援ができにくくなることもあるのではないかということを、聞いていて思いました。

実際、うちの法人は、保育園だけでなく、障害、老人と、色々な施設を持っていて、同じ敷地の中にそれらがあったり、という日常的に共生している状況があります。今、ほかの園の事例でもあるのが、小学校に行けなくなった不登校の子がいて、その子が学校には行けないけど、自分が卒園した保育園には来られる。そこで、自分が求められる。そこを拠点にし

て、今、学校に給食だけ食べに行けたり、次はお昼休みまで行って帰る、また保育園に戻ってくることをしていて。それは、保育園側が、福祉がどうとかではなくて、人として、子供が来た、じゃあどうするってなったときに、制度云々よりも、気持ちとしてその子を受け入れたい。なので、小学校に話をした。小学校もそこを分かって連携した。他にも、引きこもりの30代のご兄弟がいて、昔来ていた児童館にちょっと足を伸ばしてみた。言いたいのは、施設がそれぞれ違うので、いろんな制度のことを言い始めると、これはやっていいのかどうなのかみたいに迷うことはあるけども、もっと一般的にするにはどうしたらいいのかなと思いながら、話は聞いていました。

私が今できることは何かと考えたときに、もちろんワークショップに足を運ぶこともそうですが、私は保育の分野にいて、保育園の施設長会に出ているのですが、そこではこういった話はおそらく知られていません。だから、このような話がこういうところで出ていて、私たちもそのようなことがあったら、壁を越えてやってもいい立場なんだよ、ということを間に入って言うことをやっていかないと、私がパイプになりつなげていくことも同時にしていかないと、当たり前ということにはなっていかないのかなと思います。

〇会長

例えば、委員が民生委員の常務研究会で今回の話をしてくださったのと同じことが、委員のところでもできるのではないか、ということですね。

〇委員

そうですね。それを同時に進めていくほうが、現実味があるように思います。私はワークショップに出ているから、どんどんそういう知識が増えたり、いいなという気持ちができたりします。なので、私自身は自分の園を拠点に動くことができますが、ほかの園の人は、やっていいのか、駄目なのかすらも、おそらく現時点では知識として知らないので、実はこんなものがあって、私たちもそういったものの１人なんだって、という話をしていくことも、同時にしていかないといけないなと思いました。

〇会長

ばくっとした話をしているようだけど、すごく大事なことだと思っています。というのは、私は西宮市の地域福祉計画に関わりはじめて今年で４年目か５年目ぐらいになるのですが、前会長が今の計画を作られた当時にもやもやしていたのは、計画は立派ですが、それが具体にどう落ちるのだろうか、ということです。西宮市の規模が大きすぎるというのもあり、それが一住民とか１つの地域に本当に届くのかというところに、もやもやしていたんです。

でも今、委員がおっしゃったようなことや、委員がおっしゃったようなことも含めて、委員の皆さんが自分たちのところでもしなければならないと思ってくださったこと自体がまず凄く大きな成果だと感じました。それがない中で、いくら形だけやって「はい、これやりましょう」「あれやりましょう」と言っても、魂がこもらない、絵に描いた餅になるので、それができていることはすごくいいなと思っています。

一方で、進める側としては、令和７年度は計画中間評価を実施するとともに、必要に応じて見直しを行うことになっています。それまでに中長期的にやらなければいけないことと、

でも、今せっかくこうやって、皆さんの中で少しずつ「ああ、なるほどな。そうやな」と思ってくださっている情勢とを、どうつなげてったらいいのかというのが、すごく今、私の中でもやもやしつつ、いい感じだなと思いながらやっています。

すみません、次の議事もありますので、ひとまずこのワークショップの流れについては、一応こういう形でいかせていただくということでよろしいでしょうか。

〔発言者なし〕

○会長

では、一応この形でいかせていただきます。具体的なモデル地域の選定については、事務局からおっしゃっていただいたこと、委員からおっしゃっていただいたことも含めて、検討させていただきたいと思います。

議事（２）重層的支援体制整備事業における地域づくり支援の体制

○会長

では、続きまして、議事(2)重層的支援体制整備事業における地域づくり支援の体制について、事務局から資料説明をお願いします。

（事務局説明）

○会長

ありがとうございます。頭に入った人と、頭に入らなかった人といると思いますが、本日西宮市社会福祉協議会の方も来られているので、今の社協の生活支援コーディネーターと地区担当は何をやっていて、ここが一体化するとどのように変わりそうなのか、教えていただけますか。

○オブザーバー

今回、こういう形に至るまでに、今の生活支援コーディネーターは、どちらかといえば共生型地域交流拠点や、本年度に入ってからは子ども食堂というところが次々に立ち上がってくる中で、いろんな新しい活動者の方を地域の中で支援するということを中心に進めさせてもらっていて、元々地域福祉課の地区担当者というのは、地区社会福祉協議会という、主に地縁組織に対する支援を行ってきました。

そういった中で、従来の地縁組織と新たな活動者がしっかり協働して地域課題を協議する場が出来ている地域もあれば、なかなかそこが難しいという課題を抱えている地域もあるのが現状です。また、先ほど事務局からお話いただいたように、これまでのコミュニティにおける課題も色々と出てきていて、そういった中でしっかり地縁組織と、新たな活動者が協働し、また地域包括支援センターや障害相談などの必要な専門職、社会福祉法人、民間企業などの法人が一体となって地域をつくっていく必要性を感じています。

その中で１つ、社会福祉法人としたら、第１層生活支援コーディネーターで役割を担っている「ほっとかへんネット西宮」という社会福祉法人のネットワークもあります。１つの協議体として、どのように「地域貢献」という形で協力できるのかというところですが、特に来年度は、そこへの働きかけも、生活支援コーディネーターのサイドから強めていこうという動きもあります。

地域がそのようになっていかないと、なかなか地域課題の協議ができない状況になっている現状で、やはり生活支援コーディネーターと地区担当が別々で動くよりは、１人の人がその地域を見る。地域を見るというのは、基本的にその地域をアセスメントしていく、またそのアセスメントから分析していくことをいいます。それを基に、先ほどの地域版ワークショップであったり、市のほうから提案いただいている課題であったりを地域ワーカーと、広域ワーカーが一体となって進めていく、つながりの強化、課題の整理を進めていくメリットはあるのかなと感じております。

○オブザーバー

先ほどの話でもあったように、地区担当はどちらかというと地縁組織を中心に支援をしておりますけれども、例えば見守り１つにしても、地縁団体だけではできません。そういう意味では、共生型地域交流拠点とかつどい場とか、多様なところとつながりながらしていかないと、これからはなり立たないというのがあります。

我々も今、職員レベルで地域アセスメントを行っておりまして、社会資源をいろいろと職員レベルで把握し、また、どういう課題があるか整理しているところですが、先ほどのワークショップもそうですけれども、これを住民の皆さんと一緒に改めて見つめ直す。そういった作業を通しながら、いろんな団体とつながり合うこともこれから必要になってくるのではないかなと思っております。

特に、我々は地域福祉を推進する団体として、地域住民、当事者の主体形成づくりを進めていく必要があるので、地区担当は地縁組織のほうに偏りがちですけれども、地域を面として、広く押さえながら、新たな主体等と一緒にこれから話合い・協議の場を続けていって、その中であるテーマ、見守り一つにしても、どういう形であればその地域に合ったやり方ができるだろう、そういったことを、生活支援コーディネーターの役割、地区担当の役割が合わさって、一人の職員が地域に出て行って、支援していきたいなというように思っています。

○会長

ありがとうございます。改めて事務局に確認なのですが。今の社協のお二方の話や前段の議論の話を踏まえると、エリアワーカーの人は、例えば地域の中で、さっき言った市営住宅の大変な問題がある地域であれば、それでどうしようか、のような会、要はワークショップのようなものを主催したりだとか、地区社協にも関わったり、場合によっては、さっき委員がおっしゃった、元々委員のところの保育園に通っていた不登校の子が、小学校は無理でも委員のところやったら通えるという話があったときに、「じゃあ、こういう人の話、どうしていったらええんやろう。ほかにもこういう子、おれへんやろうか」というような話があったときに、エリアワーカーに相談したら、地域課題として捉えてくれる役割、そこから地域課題として一緒にいろいろつなぎながら議論してもらえるような役割としてエリアワーカーが置かれる、そういうイメージですか。

○事務局

おっしゃるとおりです。

○会長

というのが今までの説明だったのですが、ご質問等みなさんいかがでしょうか。

○副会長

これは、事務局への確認も含めてなんですけど、今まで地域支援をしていたほうの地区担当は、どちらかというと地縁組織とはいえ、地区社協や民生委員さんがベースだったように思います。一方で、先ほどの団地のことも含めると、これから自治会の機能が多分崩壊していく。老人会、自治会などがどんどん衰退してしまっている中で、健康福祉局と市民協働部

局、少し違うエリアを持っていますが、地縁組織に関わっていくというのは、そこも含めて見ていくという理解で合っていますか。

〇事務局

質問にうまく答えていないかも分からないですけど、この頃、国の動き、世の中の動きを見ますと、もともと社協に代表されるような、いわゆる地域をベースとした支援と、先ほどおっしゃられた8050問題のように個を支援する問題が、どんどん距離がぐっと縮こまってきています。その理由の１つが、地縁団体の消滅など、そういったものによって面的な、包括的な支援と個別支援がより近くなってきている。こういったところを見ますと、将来は、今回、地区担当と生活支援コーディネーターが合わさるのは、個別支援と面的支援を一体的に取り組まないと、多分持たないのかなというのが社会現象として起こってくる。

これは、2040年問題を含めてそういうことが起こってくるので、今よりは支援体制は低下するかも分からないですけど、できるだけ低下を免れるような、社協の新たな組織体制をするべきかなということで、いわゆる地区担当と生活支援コーディネーターが合わさるのだという感覚を持っています。

以上です。

〇副会長

今の話を聞いて僕も理解しました。その先まで見据えた形で担当するワーカーさんが捉えて、業務に向かわないと、これまで関わっていた地縁組織だけを主体でやっていってもずれてくるのではないかなと思ったので、そこだけ確認したかったんです。

〇会長

逆に言ったら、今地区社協にやっているように、もっと町内会、自治会を支援してよという話のときに、行政として、そのために変えました、ということを示していかないと、単に、要は業務の効率化になっただけですかという話になりかねないので、そのあたり、これから整理される段階でお考えになられたほうがいいかもしれませんね。

他には皆さん、いかがでしょうか。

〇委員

この西宮市の重層的支援体制において、社協への変革的な役割認識が今問われているのかなと、身の引き締まる思いをしております。今、生活支援コーディネーターと地区担当を一本化することが前面に出ていますが、大事なことは、地域包括圏域ごとにワーカーが入り込んで、そこで共生の実態が分かるというか、その意味では単なる地縁組織の小地域福祉活動を超えて、参加支援とかアウトリーチにがっと入り込んでいくことによって、共生を沸き立たせていく。そういったワーカーを地域包括圏域ごとに配置することがまず重要であって、その最も現実的な方法として、地区担当と生活支援コーディネーターの一本化という、プロセス的な方法を取るということですよね。

社協も覚悟を持ってそう言っているのですが、そこへ踏み込むことに関する表現の仕方や、財源など、いろいろなことをこれから協議していく必要があると思います。それと同時に、

計画上の認識として、そこで目指すものの本当に大事なことを、きちんと押さえていく必要があるのではないかなと思っています。

○委員

「ほっとかへんネット」の立ち上げに私も関わって、障害や高齢など異なる分野の法人が一緒に活動を行うことができるメリットは非常に大きい、これは画期的だなと思ったんです。また、今は、防災など色々なことで発展的に活動できているので、これをコーディネートしている、そういうことは非常に評価されるものであると思います。

同じように、広域ワーカーが全市的な活躍、コーディネートをしていかれるのであれば、我々が持っているネットワークに入ってきていただいて、プラスどこかとひっつけるとか、我々のネットワークをいかに活用して、次に何をするかという提案とか、我々、日々の生活の中で24時間365日お世話している世界とは別に、いろんな提案をしていただくことによって、より社会貢献の責務を果たせる。それが実現していくのであれば、非常に有意義な活動になるかなという気がします。

○会長

委員に伺いたいのですが、今回包括圏域ごとにエリアワーカーが置かれるという案が事務局から出ていますが、包括圏域ごとに、というのは、ちょうどいいのか、やはり地区社協圏域ごとに欲しいと思われるのか、その辺どう思われますか。

○委員

ちょうどいいかどうかは分かりませんが、動きやすいんだろうなと思っています。ただ、今まで聞いていて、今までもコーディネーターさんと地区担当さん、ものすごく動いてくださっていて、本当にありがたいくらい相談もできているので、これを強化という意味でどこまでやるのかなというのと、何か問題があったのかなというのが少し気になりました。また、さらに、というのは分かるのですが、支援であったりとか、人であったりは足りるのかなということも思いながら聞いていました。

あとは、我々としても包括圏域ごとの配置となれば、アウトリーチとか、個別のこともっと突っ込んだ部分でいろいろと相談できるようになって、非常にありがたいのですが、個人情報の問題が何となく残っていて。これがどのあたりまでクリアできるのかというのも気になります。

地域包括でいうと高齢分野なので、ここに子供であったり、障害であったりという分野が、どういうふうチームになるのか、どこでつながるのか、この辺も何かすっきりしないような感じで聞いております。

○会長

今、委員がすっきりしないのは、そもそも生活支援コーディネーターと地区担当はそれぞれうまく動いていらっしゃったのに、何でわざわざこのようにされるのかというのが、もやもや問題その１。

もやもや問題その２は、その人の位置づけについて、高齢も障害も子供も、オールマイテ

ィーでべたっと横につけるのか、どういうふうな立ち位置をされるのかというところ。
あと個人情報の話、どこまで共有できて、一緒に仲間としてやれるのか、というのがもやもや問題その３ですね。
この３点について、どなたか答えられる方お願いします。

○事務局
生活支援コーディネーターと地区担当の関係性、連携についてですが、もちろん連携がうまくいっているところではあるのですが、各地区により突っ込んで入っていくとなったときに、今現状であれば、一人が複数の包括圏域を担っているところになりますので、そのエリアを少し狭めていくことで、より入りこんでいくことができればと考えております。
また、両者でそれぞれ関わっている主体が、先ほどの説明のとおり異なりますので、その部分でも、１人の担当者で、それぞれの各団体との関係性を構築していくことで、よりスムーズに地域への働きかけができるのはないかと考えております。

○事務局
個人情報の話につきましては、確かに難しい面もありますが、重層的支援体制整備事業が始まりましたら、社会福祉法第106条の６に基づく支援会議が実施できますし、現在でも地域包括支援センターさんのほうでされている地域ケア個別会議等での、個人情報保護の取り扱いに基づいての協議も今までどおり可能です。アウトリーチ等を通じた継続的支援事業は、重層的支援体制整備事業で新たに始まりますが、確かに難しい面もありますが、重層的支援体制整備事業が始まりましたら、社会福祉法第106条の６に基づく支援会議が実施できますし、現在でも地域包括支援センターさんのほうでされている地域ケア個別会議等での、個人情報保護の取り扱いに基づいての協議も今までどおり可能です。アウトリーチ等を通じた継続的支援事業は、重層的支援体制整備事業で新たに始まりますが、地域包括支援センターさんや民生委員さんからの、広い意味でのアウトリーチはこれまでどおりやっていただくところにはなると思います。生活支援コーディネーターと地区担当者を一体化することで、アウトリーチ等を通じた継続的支援事業がまるっきり社会福祉協議会の職員に、ということではありませんので、そこだけ補足説明させていただきます。
以上です。

○会長
ありがとうございます。ほかに皆さん、ご質問やご意見はいかがでしょうか。新しい話ですし、マニアックな話なので、難しいところではあると思うのですが。

○委員
重層的支援体制整備の前にも、「我が事・丸ごと」とか、障害のほうだったら地域生活拠点とか、いろんな難しい言葉が並び始めて、共生社会を実現していきましょう、というような話が出てはいるのですが、障害の協議体の中で、地域割りでいろんな協議ができたらいいよねという話をしていくときに、なかなか通じないことがあります。自分のやり方が悪いのかもしれませんが、なかなか入りづらいというのが１つある。

また、今おっしゃっている生活支援コーディネーターや地区担当の職員さんを、どこまでうちの協議体の中で意識して関わっていられるかというのが、分かっている人より分かっていない人のほうが多いのではないかというのも感じます。障害がどうしても、個別の障害特性に合わせた議論に寄り過ぎているとか、あとは社会参加とかそういったものを目指していくことに寄りがちだった、というところが経過としてあるんですけど、例えば包括圏域単位で話をするときに、事業者自体がどこまでそこに参画できるかは、この辺の定義の話をしていかないといけないかなというのは、自前の会議の話ですけど、少し思ったところです。

○会長

委員、確認ですけど、障害者自立支援協議会は、ここでいうとエリアワーカーの領域ではなく、広域ワーカーさんが関わる領域だから、例えば、要は包括圏域ごとの話よりも、市全体の中で、この障害の人はどうだとか、あの障害の人はどうだと、個別の障害ごとの問題として議論されるところが多いから、こういうふうに地域ごとに分けられると、うまいこと通じるかなというもやもやがあるという理解でよろしいでしょうか。

○委員

本来は多分、その方が住んでいる地域ごとの、まさに地域の包括がその方のつながりを見ていかないといけないのが根本だと思うのですが、この障害というくくりにしてしまうことで、その方が住んでいる地域をなかなか見にくくなってしまったりとか、どうしても障害種別とか障害状態に合わせたくくりでの協議になりがちなので、どこまで地域を意識できるかが、少し課題ではあるかなと思っています。この間、ずっとそれを取り組もうと思って、いろんな方に来ていただいて話はするのですが、その芽がなかなか芽吹かないのも、事務局がおっしゃった、やっていることの継続性みたいなのがなかなか担保できなかったなと、振り返りをしていて思いました。ここを事業者にもしっかりと理解をしてもらうとか、ワークショップの中に皆がどれぐらい入れるかということも含めて、少し考えていけたらいいのかなと思っています。質問とはずれましたけど。

○会長

いえ、大丈夫です。認知症の話やったら、各包括圏域でも十分に対象者がいるので議論しやすい。あるいは、例えば少子化、子供が少ないのも、子供がしんどい思いを抱えているのも、割と圏域単位でも議論しやすい。一方で、難病の子が、とか自閉症の人が、というふうになると、圏域単位になると少なくなってしまうので、数の問題として議論しやすい話と、議論しにくい話に分けられていって、だからこそ、障害者自立支援協議会という市単位で議論しなければならないのがこれまで中心だった。

でも一方で、その人はどこかの地域で住んでいるわけであって、その地域の中で本来返さなければいけないけど、返してこなかったのを、これからどうするのかというところが課題だと思ってくださったということですね。

○委員

そうですね。今まさに、そっちにシフトしていかなければならないよねと、共有はしてい

るのですが、障害の事業者の数がすごく増えていく中で、根本的な理解がどこまでできるか少し気にはなるし、あとは、この方が生きていく中でのライフステージの変化が大きく、やっぱり障害の方の場合は一個一個出てくるわけなので、そこをきちっと捉えられるかというところです。

○会長

わかりました、ありがとうございます。ほかに皆さん、ご意見等よろしいでしょうか。

○委員

地区担当と生活支援コーディネーターが一本になって、ワーカーとして配置されるということですが、西宮がようやくこうなったということで、結構、全国的には一体的に動かしているんです。というのは、生活支援コーディネーターって、もともと財源が介護保険なんですよ。だから、対象者が高齢なんです。高齢者のコーディネート、地域コーディネートをするんですけど、高齢者のことだけやっていたって、うまいこといくはずないやんというので、流動的に生活支援コーディネーターが地区のワーカーみたいな動き方をするのが、予算措置的に認められているか認められてないかは置いといて、実態としてはそうなっていると思います。この実態に合わせた形で予算づけをしてもらった、というのが、このエリアワーカーです。

その中で、包括的支援体制という大きな話もそうです。高齢者は先に地域包括という概念を用いて動き出したのですが、高齢者だけその仕組みでやるのではどうにもならないということで、障害も全部含めた包括的な支援の体制をつくりましょうという、かなり端折っていますけど、イメージとしてはこのような感じです。それに対応しようと思うと、こういったワーカーの充て方をしておかないと、結局、何のことか分からん、というようなことが起こるよねとずっと懸念されていて、今それが予算措置的にも体制的にも整ったというのが現状かなと思います。

本来、個別支援と地域支援は、地域支援というとイメージが違うかもしれないですけど、個別の問題を個別の問題だけでやるのではなく、地域の考え方が入ります。地域に１人、障害の方がいる。この人は障害者であると同時に、住民であるという視点がどれだけ持てるかというのは、これまでずっと社協の地区担当に求められていた視点であり、住民として地域へ参加することが難しくなっているのであれば、参加のできる場をつくっていく、議論を起こしていくのが、いわゆるコミュニティワークだと思います。

そういったことを一体的に、となると、このエリアワーカーはものすごい役割を担い、スーパーマルチに動かないといけない話になりますが、実際的にそれは難しいので、何をするかというと、自分が窓口になって、地域の中で課題を議論できるようなにネットワークをちゃんとつくる。エリアワーカーが１人で全部何かを解決するのではなく、どうやってそれを地域で抱えていくのかという議論を起こしていく、というのが１つ求められる役割かなと思っています。

もう１点だけ申し添えておくと、仕組みがすごく複雑なのですが、包括的支援体制の中には、大きく相談支援と参加支援と地域づくり支援が位置づけられています。社会福祉協議会のほうのすすめる会議で会長が分かりやすく解説されていたのをそのままお借りしますと、相談支援、もちろんいろんな相談、何の相談でも構わないですよという総合相談は何のため

の相談支援なのかというと、参加につなげるための、参加支援のための相談支援です。地域に参加できるようにしていきましょうという参加支援は、地域づくりを目的に、主に据えて参加支援を行っていく。その結果、地域づくりが行われていく。これが重層的に重なり合って、動かしていくというのが、包括的支援体制のイメージ、国が出しているメッセージです。

地域によって、課題のウェイトも違う、種類も違うとなったときに、そういったことをエリアワーカーがどれだけ把握をして、整理をして、優先順位を地域の中でどのようにして合意を取っていくかというところが、今回、この体制づくりを進めていく上で大きな役割なのかなと思います。

だから、言ってもすぐに解決していくわけではなくて、従来からの伴走的支援の側面も持ちながら、一緒に考えていくパートナーとして、いろんな捉えがある中の１つの窓口として、エリアワーカーが動いていて、それをスーパービジョンするような形で広域ワーカーが見ていく。

これがうまく回るかどうかというのは、ワーカーの力量にもよるかもしれませんが、地域の支え、協力がないとどうにもこうにもならないので、そういった協力をうまくワーカーが求めていけるのか、にかかっています。求めていける関係性をつくっていくことが、入り口として非常に大事になってくると思うので、そういった点では地域の方々もぜひ積極的な関わりとご協力をお願いできればうれしいなと思っております。

○会長

今の委員の話はすごく大事で、逆に事務局に伺いたいことは、例えば先ほどの市営団地の問題にエリアワーカーが関わろうとしたら、ぶっちゃけて申し上げると、かなり経験がなかったら入ることができないと思います。別に、今の社協のやり方が悪いというわけではなくて、今の生活支援コーディネーターや地区担当の人達がワーカーになってくれるのであれば、ちゃんとそこは人材育成して、継続的にスーパーバイズをして、というふうにしないと、一生懸命、個人的には働いてくださるかもしれないけど、個別支援に埋没してしまって、地域をつなぐということができない可能性があって。

特に、個別支援がすごくよくできる人が地域支援もできるかと言ったらそうではないので、地域支援、地域づくりができるワーカーとしての研修だとかスーパーバイズをするのと、もう一方は、重層的支援の困難事例会議みたいなところでも、スーパーバイズのようなものが求められています。

何が言いたいかといったら、困難事例についての重層的支援の話でも、地域づくりの話でも、どっちも人材育成が鍵で、人材育成とスーパービジョンのようなものを定期的に３年間から５年間ぐらいかなり力を入れてやらんと、これは絵に描いた餅になりそうだということです。一方で、西宮市は財政が大変だとも聞きますので、ちゃんとそれをしてくださるのかなというのが少し心配なのですが、事務局いかがでしょうか。

○事務局

なので、先ほど申しましたワークショップにて、これをやるべきだと思っているんです。地域福祉計画に位置づけたワークショップの中で、新たな社協の体制の人もその会議に入ることによって、人材育成を兼ねた上で課題解決ができるのではないか。

以上です。

○会長

なるほど、わかりました。１個だけ言うと、それも使ってほしいけど、それ以外にも研修してね、それ以外にも人材育成のお金をつけてねというのは大事なポイントです。もちろん、例えば副会長のような力量のある人が一緒に入ってくださるワークショップの場は大事ですが、それはあくまでも１個であって、それ以外にもきちんと、行政と社協でそういう人材をつくっていくための人材育成がすごく大事で。

１つの例を申し上げると、私、国の重層的支援の会議の委員をしていて、事例を聞いたのですが、石川県の加賀市では、総合相談課をつくったときに、生活保護も総合相談課の中に入れてしまって、保健師が生活保護担当の行政マンと一緒に行くことによって、ある程度のＯＪＴをするとか、あるいはそれだけでなく、地域ごとの相談については、市の総合相談課が必ずスーパーバイズに行って、各地域の問題について一緒に取り組むことによって見えてくる、のようなことをされています。あるいは年に１回、宿泊で合宿することも含めた、かなり力を入れた人材育成を５～６年やってきて、やっと重層的支援ができるようになってきたと聞きました。

もちろん、私たちも協力するけれども、私たちだけでは多分できないことなので、行政主導でそういった相談支援の力量を高めるための研修だとか人材育成も、次年度以降ご検討されたほうがいいのではないかなと個人的には思います。

○事務局

当然でございます。行政につきましては行政がきちんと人材育成しますけど、やはり地域の実践が非常に難しい。なかなか経験が積めないものですから、そういったところはワークショップで、というふうにお願いしますし、行政がすべきことはさせていただきます。

以上です。

○会長

ありがとうございます。他に皆さんご意見等いかがでしょうか。

○委員

先ほども申しましたように、広域ワーカーの仕事が、資料を読ませていただくと、市全域を担当し、地域福祉課題の解決に向けた全市的な活動主体との連携体制との構築や、個別支援事例におけるエリアワーカーのサポート及び支援者間の調整等の役割を担います、という中で、地域づくり事業等ここに３つほど書かれていることについては、私は非常にすばらしいなと思っているんです。そして、この全市域でのネットワークの構築とか地域福祉に理解のある土壌づくり、地域資源の発掘・開発というのも書かれています。ボトムアップで色々なことを提案されて、例えば我々社会福祉法人も協力できる体制を整えることができるような提案がしっかりなされれば、この広域ワーカーの役割は非常に大きな役割を担うと思いま

す。

逆に言えば、広域ワーカーの人の、僭越ながら、資質のようなものをしっかり向上させていただいて、我々に対して働きかけをしっかりやっていただいたら、もっと色々なところが機能していくと思うし、機能することが非常に大切だと思います。協力体制を整えるために、上から目線でもなく、地域の課題、全市的な課題を団体として解決できる力を引き出すことができるような、そういう役割は非常に大きいと思っているんです。

そういう意味でぜひ、これが機能するようにしっかり対応していただいたらありがたいと思います。

○会長

そろそろ時間になってきたのですが、他に何かご意見はよろしいですか。

○委員

皆様、こんにちは。行政側と、社協さん、また各種団体の方の話を今まで聞かせていただいて、本当にいい討論会だと思いました。

第２回目のワークショップのあとの話になりますが、8050問題、ヤングケアラーの問題を、自分の団体に持ち帰ってというふうに言われたので、私が副会長をしている介護者の会に持っていきました。

私たち介護者の会は、高齢者の人が多いので、8050問題が大事だと思います、と投げかけたのですが、両方の問題について大学の先生のようにたくさん調べて持ってきてくださって、意外にもヤングケアラーのほうに皆さんの関心が行ったんです。なぜかというと、今、幼い子供が兄弟を見たり、親を見たり、学校へ行けないという状況が、自分が住んでいるマンションの中でも幾つもあると。ご自身も介護なさっていて大変なのに、そういうところに目が行くと。ですから、私たちにとって8050問題が大事だと思います、と言ったのは間違いだったような気がしました。

今、少子高齢で日本は大変なんです。そういうときに、8050問題よりもヤングケアラーの問題のほうに話題が行ったことは、未来が見えた、というような気がして、すごくうれしかったんです。

今日、色々な話を聞きましたが、行政も私たちも各種団体も、一人の人を取り残さないというＳＤＧｓの根底がここにあるなと思って、西宮市もこれから未来が開けていくかなと感じながら聞いていました。私も本当に、自分にできることを頑張って、何か地域に貢献して恩返しをしたいなと、ずっと思っているんですよ。

ですから、このワークショップもすごくためになりました。いろんな関係の方と話ができて、人の話を聞くのがとても勉強になって、そこからまた開けていけるということを確信しました。委員も楽しかったとおっしゃっていましたが、私も楽しかったんです。

そういうことで、もう終わりますけど、文豪、ロシアのトルストイが「人生で偽りのない幸せは、人のために生きることだ」と言いました。ここがＳＤＧｓの根本だと思いますので、それぞれの立場で頑張って、このすばらしい策定委員会でやっていきたいと思います。今後もよろしくお願いします。

○会長

ありがとうございます。会長の代わりに締めていただきましたので、今日の議事は以上にしたいと思います。

その他、連絡事項

○会長

では事務局から、その他連絡事項をお願いします。

○事務局

本日は、委員の皆様よりそれぞれのお立場からご意見や具体的なご提案をいただきましてありがとうございました。本日いただきましたご意見等につきましては、事務局内で内容を踏まえまして、今後の取組を検討してまいりたいと思います。今後も引き続きご協力を賜りますようお願い申し上げます。

次回委員会につきましては、令和６年夏頃の開催を予定しております。委員の皆様には、開催の１か月前までにはご案内させていただきますので、ご出席のほどよろしくお願いいたします。ワークショップにつきましても、内容を会長、副会長と調整させていただいた上で、ご案内させていただきます。

○会長

それでは、閉会に当たって副会長から一言お願いします。

○副会長

皆さん、本日も長時間の議論ありがとうございました。僕も少し話し過ぎたので、全員の発言がなかなかできず申し訳なかったのですが、今日は大きく２つの議論がありました。

１つは、ワークショップの今後の方向性の中で、今度は地域・リアルな実態に落としていくということ、それは今後、令和７年度の評価を見据えた形で、モデルとして進めていく。一方で、委員が言われたみたいに、委員だけじゃなくて、参加した人たちが必要性を感じて、自分たちが持っているネットワークで何かできないかとアクションにつながっていけるように、どうしていくかが重要かなと思いました。

２つ目に、重層的支援体制整備事業の体制について、広域ワーカーとエリアワーカーがつくられていくということですけど、やはりワーカーは数年で入れ替わっていくということがなかなか厳しい状況ではないかと思っています。僕自身、10年以上地域でやっていても難しいと思うところがある中で、配置されるワーカーさんが働きやすい、動きやすい環境づくりをどうしていくかという、そういう目線もすごく重要なのと、この人たちにどう成果を求めていくかというときに、行政的にも数年で見ていかないといけない、おそらく焦ることになると思うんですけど、やはり時間がかかるということも念頭に置いて評価していく姿勢も重要ではないかなと思っています。

引き続き、来年度も皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

○会長

では、これで閉会します。ありがとうございました。

〔午後３時57分　閉会〕